SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

ＥＳＤ推進・キャリア教育充実に焦点をあてた実践に関する事例研究：総合学科高校における社会との接点を重視した課題解決型学習

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 深澤, 邦洋, 田宮, 縁 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024685

ＥＳＤ推進・キャリア教育充実に焦点をあてた実践に関する事例研究

～総合学科高校における社会との接点を重視した課題解決型学習～

深澤　邦洋*　田宮　縁**

A Case Study on ESD & Career Education at Suruga Sogo High School

Kunihiro Fukazawa*　Yukari Tamiya**

要旨

ＥＳＤ推進・キャリア教育充実を目指して実践してきた総合学科高校の「産業社会と人間」と「総合的な学習の時間」での実践事例の中から、学校外部の専門性を有する人材との協働による取り組み事例を取り上げ分析、考察を行った。本実践が可能となった背景には、①各プロジェクトが入れ子構造をなしている。②豊かな人的ネットワークの背景には、「縁」が本実践の通奏低音となっており、担当者の在り方や生き方と深く関係している。③コーディネーターの配置がホールスクールアプローチの鍵となるということが示唆された。

キーワード：総合学科高校　総合的学習の時間　ESD　キャリア教育　外部連携

１　研究の背景と目的

（１）駿河総合高校の School Identity

本研究の対象校である静岡県立駿河総合高等学校は、平成 25 年 4 月に開校、平成 30 年度で創立 5 年目の新構想（総合学科）高校である。その特性として、以下 3 点が挙げられる。

⑴　静岡県内唯一の都市型総合学科高校
⑵　静岡市駿河区唯一の公立高校
⑶　特別支援学校を併置した高校

⑴は、県庁所在地に立地しており、様々な高等教育機関や研究施設、事業所などがあり、産・学・官との連携や協働に取り組みやすい環境を有している。

⑵は、多くの公立高校がある葵区や清水区とは事情が異なり、自ずと「持続発展可能な地域社会づくりの主体的な担い手を世に送り出す」ことが使命であることを意味する。

⑶は、健常者である高校生と、軽度の障害を持っている特別支援学校の高等部生徒が日常的に時間・空間・行動を共有する環境の下、互いの人権を尊重し合って、互恵感覚を高める共生共育という点も期待されている。

こうした特性を踏まえ、学校経営計画には、教育目標として「適切な判断力を持ち、個性を確立すると共に他者と協働し主体的に社会に貢献する人を育てる」とあり、その教育方針には、以下のキーワードが明示されている。

ア　共生・共育、人権感覚
イ　実社会との接点を重視した教育
ウ　持続可能な社会を創造する担い手
エ　他者と協働し主体的に行動
オ　地域の文化や伝統産業を生かした教育
カ　地域の発展に貢献

小学校の「生活科」や小学校・中学校での「総合的な学習の時間」（以下、「総学」、「総合学習」）は、学校によって、「クラス総学方式」や「学年総学方式」と呼ばれ、内容や方法は多岐にわたっている。一方、高校の場合、大学進学希望者の多い普通科高校では、総合学習を進学指導に当てているケース、また、専門高校では、課題研究等に代替しているケースも多い。

先述した３つの特性を備える駿河総合高校では、学校経営計画の下、ホールスクールアプローチで、ＥＳＤ推進・キャリア教育充実に取り組んでおり、その明示的な学習時間として「産業社会と人間」と「総合的な学習の時間」を位置付けている。また、その中で生徒自身が高校生活３年間を見通した学習計画・評価計画という大枠（「５Ｗ１Ｈ」）が定まっているもの本校の特色の一つといってよいだろう。

つまり、「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」の中で、駿河総合高校生としての共通性を備え、多様な教科・科目の選択や課外活動への挑戦を通して、個人の志向性を伸ばしていくことを企図している。

（２）「産業社会と人間」、「総合的な学習の時間」の概要

本校の「産業社会と人間（総合学科高校の必履修科目）」（以下、「産社」）や「総合的な学習の時間」は、生徒の発達段階を考慮しつつ、教科横断的課題、実践探究的課題などを、リニアかつスパイラルにカリキュラムに配置しており、「習得・活用・探究」という探究的な学び方を開校当初から実践してきた。ただし、生徒の学びの進捗状況に応じて適切に比重配分したり、柔軟に必要な要素を取り入れたりすることにも配慮を

*静岡県立駿河総合高校
**静岡大学教育学部

重ねている。

前述の「５Ｗ１Ｈ」の「WHY?」については、知識を広げることで、「やってみたい（WANT 感覚）」を芽生えさせ、試行錯誤することで、「出来そう・合わなそう（CAN 判別）」を体感させ、選択集中させることで、「やりきろう（MUST 実行）」という内面と行動の変容を引き起こすことを意識している。

「５Ｗ１Ｈ」の「HOW?」について、「総合的な学習の時間」に限って言えば、「（教師が本時テーマについて）語る、（生徒どうしが）語り合う、（生徒に話したり書いたりして）語らせる」という展開が各回授業の基本フォーマットとなっている。

「産社」・「総学」の３年間の概要は以下の通りである。

表１　「産社」・「総学」概要

１年産社	・自校理解（履修計画ガイダンス） ・産業社会理解
１年総学	★「（知っているを）広げる」をテーマに自分のキャリア開発基礎知識を習得する ・自己理解 ・学問 / 仕事理解 ・高校生活の送り方 / 当面の進路目標設定
２年総学	★「（よく調べ・比べて）選ぶ」をテーマに知識とスキルの活用 ・ＮＩＥ静岡 / 沖縄比較研究 ・進路目標実現方法 / 計画の研究
３年総学	★「（志を立てて）挑む」をテーマに高校卒業後の進路の探究 ・進路実現探究ゼミ ・学びの軌跡整理 or 学びの継続 / 深化

実践計画を考える時には、学習の目的・目標・内容などを踏まえ、妥当性・客観性・現実性・波及効果などを意識した評価計画を同時に考えるものある。

「総合的な学習の時間」は、文章記述による評価をすることになっているが、これは教員の仕事量をたいへん増大させる。本校では、「生徒の不利益にならないように」ということを優先しながら、教員負担の軽減という現実性も重視して、いくつかの事実情報をデータ入力することで、自動的に調査書に記載可能な文字数に合わせた文章表現が完成するオリジナルのプログラム（第一筆者考案）を使用している。同時に、目に見える証が残せるように、生徒には現物ポートフォリオを作らせている。

（３）目的

本稿の目的は、ＥＳＤ推進・キャリア教育充実を目指して実践してきた平成 29 年度上半期における「産業社会と人間」と「総合的な学習の時間」での実践事例の中から、学校外部の専門性を有する人材との協働による取り組み事例を取り上げ、実践内容と生徒の変容について省察的に整理した上で、担当者（第一筆者）が省察的に実践を考察するとともに、本実践が可能となった背景について第二筆者が分析する。

２　「総合的な学習の時間」における実践の省察

「総合的な学習の時間」における実践の一部（学校外部の専門性を有する人材との協働による取り組み）を省察する。

（１）１年次生

「（知っているを）広げる」のテーマに即して、３年間の高校生活を送る上で、また、その先の生き方（学び方・働き方）を考える上で、ヒントを提供してくれるような方、ロールモデルとなりうる方との出会いの機会を設定している。

①　６月　伊藤真奈美氏　講演＋座談会（有償）




過年度、健康福祉分野の産業としての可能性を担当者が知り、県の健康福祉部との協働で生徒の進路選択の参考となるようにという意図の下、「福祉×○○」と題した講演を実施したが、本年度は、学びの深化をねらい静岡市出身で、現在兵庫県在住の看護師、伊藤真奈美氏を招き、「諦めない心」と題した講演をして頂いた。

伊藤氏は、看護学校在籍中に交通事故に遭い、右腕に義手を装着しながら働いているという人物で、水泳選手としてロンドン・パラリンピックにも日本代表選手として出場された経験も有している。講演の終盤に、伊藤氏は趣味のバイオリン演奏を披露してくれた。このようなキャリアを歩んでいる方に「諦めない心」というお話とバイオリンの音色は、高校生の心に響いたようだった。

１年生全員で外部講師の講演を聞いた後に、希望者だけを募り１時間程度の座談会を開いた。学年全体で講演を聴講した後で、希望者（10～20 名程度）だけが座談会を持つというのが、２年３年になっても変わらない本校の実践の特徴である。学びの機会は平等に提供し、希望する者にはさらに学びを深める機会も提供する仕組みを設けることで、一人ひとりの「志向性」を確かなものにしていくことに資すると考えている。

この企画は、伊藤氏の高校時代の恩師が本校の職員（福祉担当）に在職しており、職員と卒業生との縁により実現したものである。

②　９月　きゃりこみゅ²ワークショップ（有償）




大学生や若手の社会人でメンバー構成されているＮＰＯしずおか共育ネットのメンバーによる「きゃりこ

みゅ²ワークショップ」を 2 時間連続で実施した。親でも教師でもない、かといって友人でもない、いわばナナメの関係にある先輩と、ワーク・キャリアとライフ・キャリアについて語り合う活動である。

この活動は、４月の R-CAP 適性検査、５月の保護者インタビュー、夏休み中の職業人インタビュー、その直前の職業人インタビュー事前学習、休み明けの報告会、10 月の選択履修科目登録と関連づけたプログラムの一環と位置付けている。一見、単発に見える活動が、実は時期を置いて連鎖しているという仕掛けになっている点も本校の実践の特徴である。

職業人インタビュー事前学習では、しずおか共育ネット代表の井上美千子氏に、アポ取り電話のマナー、訪問時のマナー、インタビューのコツ、インタビュー後のお礼の仕方などを指導して頂いた。

今年で３回目の実施となるこの企画は、しずおか共育ネットのメンバーに、本校の前身である静岡市立商業高校の卒業生がいるという縁によって実現した。

（２）２年次生

「(よく調べ・比べて）選ぶ」のテーマに即して、NIE 静岡・沖縄比較研究のテーマ設定をする上で参考になるお話や、具体的な研究の進め方などをお話しして頂ける方を招聘している。

③　５月　『窓辺』執筆者講演（有償）




平成 26 年度から 28 年度の３年間、駿河総合高校は、NIE 実践指定校として、様々な教科において新聞を活用した授業を開発してきた。新聞はキャリア学習の好材料であると考えて、「総合的な学習の時間」においても、１年の３学期から、新聞を積極活用している。

初めは、生徒に対して、自分なりのペースで、気になった記事をスクラップしておくように指示するだけである。しかしこの蓄積が後々、生徒本人が自分の志向性について探る手掛かりとなる。

５月連休期間や、夏、冬、春の長期休業中には、静岡新聞夕刊コラム『窓辺』執筆者の中から地域課題の解決に取り組んでいる一人を選び、一連の記事を読み通し、休み明けに、執筆者本人による講演を聞く。

１回目は、浜松の竜ヶ岩洞支配人である小野寺秀和氏に、「探る・究める」と題して、無名の洞窟を人気観光スポットにするまでの苦労話をお話しして頂いた。

講演後の座談会では、国内でも有名な鍾乳洞が、観光客へのサービスの意味で、見えないところでエアコンを使用しているというエピソードや、日本平周辺にも未開発の洞窟があることなどを教えて頂いた。

小野寺氏に講演して頂いたのは、『窓辺』執筆者であるということに加え、担当者の義父の知人という縁による。

④　６月　市民リレートーク（一部有償）




市民代表４名の方に来て頂き、「(暮らしていて思う）静岡の魅力・静岡の課題」を生徒の前で議論して頂いた。

JTB 中部の麻生智子氏からは、旅行業者視点から「静岡の学校は、修学旅行の目的地も時期も一か所一時期に集中するが、これは他県ではあまり見られない」という生徒も教員も気付いていなかった県民性を紹介して頂いた。

元静岡市 PTA 連絡協議会の会長を務められた藤田三佐子氏からは、教育関係者兼生活者視点から、市内３区の学校給食の違いや、南北を結ぶ道路が整備不十分であることなど、行政的な懸案課題を紹介して頂いた。

学校近隣で SO わした沖縄物産店の伊波里紗店長からは、沖縄の住民しか知らない見所を紹介して頂くと同時に、研修旅行時には、静岡の住民しか知らない見所や美味しいものなどを紹介して、旅行後も交流を深めて行くようにと助言を頂いた。

静岡市企画局の芹澤加奈子氏からは、静岡で暮らす中で気付いた問題点は、その解決に向けて市民自身が動き出すことで、行政組織も支援できるようになるという仕組みを紹介して頂いた。

リレートーク後の座談会には、伊波店長の父親（伊波武郎氏）や、兄（伊波郡氏）にも参加して頂いた。

座談会では、病気で声が出ない武郎氏が、電動式人工喉頭を使って、10 代で沖縄を離れ、東京での生活を経て、静岡永住に至った半生や、琉球王朝と静岡市清水区にある古刹清見寺のつながりなど、沖縄出身の静岡定住者だからこそ知っている事実を教えて頂いた。

リレートークにご協力頂いた麻生氏は本年度研修旅行の添乗員、藤田氏は担当者と PTA 活動の仲間、伊波店長は静岡市立商業高校卒業生、芹澤氏は担当者の隣人であり静岡市駿河区自治会連合会会長を通じてご紹介頂いたという縁である。

⑤　９月　山極芳樹教授講演（無償）



宇宙エレベーターの研究開発を進めている静岡大学工学部の山極教授に来て頂き、映像やモデルを提示しながら、「静岡から世界へ・宇宙へ・未来へ」と題した講演をして頂いた。

生徒は１年次の英語授業で、SF でしかないと思われていた宇宙エレベーター構想が遠くない未来において実現するという話を学んでおり、その際、実現に不可欠なテザー展開技術を静岡大学工学部の研究チームが宇宙で実証実験することを報じる新聞記事を読み通していた。

山極教授からは、ご自身がリードする研究開発に現役学生も関わっていることを紹介し、進学するにせよ就職するにせよ、その道を究める心意気が大切であることも助言して頂いた。

科学技術に関する専門的で難解な言葉が出てきたにも関わらず、未来の当たり前に対する生徒のワクワク感は大いに刺激された。

昨年６月には、２年次生対象に法政大学大学院静岡サテライトキャンパスの坂本光司教授に「静岡で働く・暮らす～人を大切にするいい会社の話～」と題した講演をして頂いている。山極教授や坂本教授のような、静岡が全国や世界に誇る知的巨人を講師に招くことが出来たのは、ふじのくに地域・大学コンソーシアムの高大連携出張講座（静岡県補助事業）を活用してのことである。

⑥　10 月　平岡義和教授講演（無償）




開設２年目となる静岡大学地域創造学環の学環長でもある平岡教授に来て頂き、地域創造学環における学びの特徴を紹介して頂くとともに、「フィールドワークの方法」と題して、地域学を学ぶ意義と、効果的なインタビューの仕方を紹介して頂いた。「記憶に留めるためには記録が大切、そのために筆記用具は常に携帯する」との助言は、研修旅行での現地調査を控える２年次生に大いに参考になった様子である。同様のことは、筆者も含め本校教員の誰もが日常的に言っていることだが、どのような立場の誰が発言するかによって、響き方が全く異なってくるものだと再認識させられた。

平岡教授による講演は、静岡大学の高大連携出張授業を活用して実現している。同事業を活用して、11 月には教育学部の池田恵子教授による「安全・安心な町づくり」と題した講演（無償）も実現した。

２年次の事例③～⑥の流れを通して見ると、「静岡・沖縄比較研究」という取り組みを概観すると、一見「地元就職や地元進学へと誘導」と誤解されるケースも少なくない。確かに、本校の「総合的な学習の時間」の学習計画は ESD 推進を底流としており、ローカルな題材を扱い、行動変容を促している。しかし、持続可能な社会づくりの担い手としての活躍の場が静岡であっても、他の地域であってもよいと考えている。真に育みたいのは、生徒が将来どこで暮らそうが、どんな仕事に就こうが、地域愛を抱き、地域課題を当事者感覚で捉え、課題解決に向けて自分に出来ること実行しようという態度である。

本校の ESD 推進に関しては、ASPUnivNet に加盟している静岡大学教育学部の支援を受け、ユネスコスクール加盟申請中である。また、静岡大学教育学部の ESD・国際化ふじのくにコンソーシアム事業のステークホルダーとして、本校を会場に教員を対象とした研修会実施（５月・10 月）や、静岡大学を会場に生徒向け特別授業実施（６月）といった支援を受けている。

＊６月　ESD・国際化ふじのくにコンソーシアム特別授業



（３）３年次生

本校はホールスクールアプローチで「総合的な学習の時間」を実践しているが、学年の進行に合わせて、駿河総合高校生としての「共通性」と、一人ひとりの志向性自覚や選択に基づく「多様性」という一見相容れない特性をバランスよく深化させることに挑戦している。

１・２年次は、全学年対象の講演プラス関心の高い有志生徒対象の座談会の事例報告であったが、３年次は「（志を立てて）挑む」というテーマに基づいた、特定分野に特化したゼミ集団における実践と、全学年を対象とした共通実践の２例を報告する。

⑦　６月　本田尚子氏看護出前授業（無償）



将来、医療・看護分野で活躍しようと志を立てた生徒集団のゼミで、静岡赤十字病院副看護部長の本田氏に出前授業を行って頂いた。

本田副看護部長には、病院勤めの看護師が果たす業務の説明と、基礎的・応急的な医療処置などについてご指導頂いた。本田副看護部長にご指導頂くことが出来たのは、日本教育新聞社と静岡県看護協会がタイアップして実施している「看護の出前授業」というプログラムを活用したことに縁る。

また、このゼミ集団は、10 月に静岡県立大学の高大連携事業を活用し、静岡県立大学の高林ふみ代准教授による「大学で看護学を学ぶために大切な高校、での学び」と題した特別授業（無償）も受けている。

＊10 月　静岡県立大学高大連携事業



「総合的な学習の時間」の実践事例ではないが、9 月に家庭科の授業でも、静岡県立大学の高大連携事業を活用し、食品栄養科学部の新井映子教授に「食べ物と食べ方から栄養を考える」や「調理における色の変化」をテーマに特別授業を実施して頂いた。

⑧　７月　吉本 寿氏 NIE 講演（無償）





静岡新聞社の吉本氏に来て頂き、「新聞の読み方」と題した講演を実施した。元々はＳＢＳ放送のアナウンサーとして活躍されていた吉本氏は、間近に就職試験、大学入試などを控えている生徒に対して、今直ぐ始められる、そして末永く役立つ新聞を使った勉強方法や対人コミュニケーションにおける笑顔の大切さを解かり易くお話しして頂いた。

吉本氏に講演して頂けたのは、本校が昨年度まで NIE 実践指定校であったことに加え、静岡新聞社の NIE 出前授業というサービスを活用したことに縁る。

３　今後の課題

ESD 推進・キャリア教育担当者としての３つの課題を述べる。

（１）　職員の共通理解の確立

駿河総合高校では、「総合的な学習の時間」を柱に、撓やかさ・賢さ・優しさを備えた若者を世に送り出そうと努めている。その努力は、四方善し（生徒は「行ってよかった」、保護者は「行かせてよかった」、教師は「勤めてよかった」、地域の方々は「在ってよかった」と歓迎されるもの）だ。

ESD 推進やキャリア教育充実を本校の看板に掲げるのは、新構想高校である駿河総合高校のスクール・アイデンティティを解かり易くアピールしており、職員全員が共通理解の下で進められれば、一層の教育効果が期待できる。その為には、学校内外における研修の充実と併せて、教員にとって分かり易い成果実感が肝心なのだろう。要するに、就職も進学も、生徒が希望する次のステージへの高い合格率を実現することだ。

（２）職員自身の当事者意識の喚起

次に、教師自身が、時代劇でお馴染みの「遠山の金さん」や「暴れん坊将軍」のように市井と関わって社会参画することだ。多様な人々と関わり合うことを通して、教師自身が世の中の実態や変化を体感し、当事者の一人という感覚を持てば、ESD 推進はマスト（must）だとコミットできる。

（３）協働の主体は生徒、主導は教師

学校において教科横断的・実践探究型・協働による課題解決型学習に取り組むに当たっては、その主体が生徒であるべきことは言うまでもないだろうが、主導は教師であるという認識である。学校外部の専門性を有する方々と共に活動するような場面において、親切な誰かに丸投げするのではなく、理論面でも実践面でも生徒理解のプロであるはずの学校教員が主導する姿勢が大切である。

本校の「総合的な学習の時間」には、実に多様な学校外部の専門性を有する人材が関わっており、それぞれが独自の目的に応じた高校生向け教育プログラムを持っている。授業実施前に十分な事前打ち合わせをして、学校としての方針を伝え、それに合う方向での調整をして頂いた上で実施して頂いている。有償の場合の金額も含め、事前の打ち合わせに臨む者は、相手に失礼にならない範囲での交渉力が欠かせない。

「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」を軸に、ESD 推進とキャリア教育充実を目指す取り組みは、総合学科高校として開校して以来、確かに順調に進んでいるが、学校の特性理解、当事者意識、協働における教師主導の力量を備えた一部の教員の頑張りに依存している部分が大きいのが実態である。機関包括型のレジリエント（撓やか）で持続発展可能な教育プログラムにするためには、教師一人ひとりの力量アップに加えて、組織体制の整備が欠かせないと考えている。

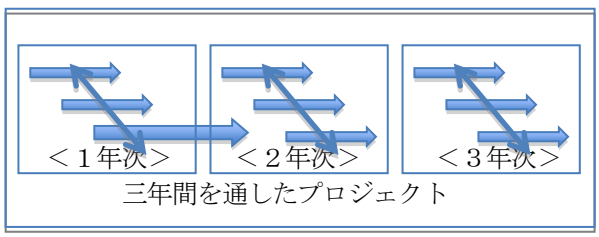
４　総合的考察

本実践の特徴を以下の３つの視点から述べた上で、今後の研究の課題に言及する。

（１）入れ子構造のプロジェクト

第一筆者が、「一見、単発に見える活動が、実は時期を置いて連鎖しているという仕掛けになっている点も本校の実践の特徴」と述べている通り、年間を通していくつかのプロジェクトが互いに関連性をもちながら

図１　プロジェクトのイメージ



パラレルに展開されていく。

例えば、１年三学期から実践される NIE は、静岡と沖縄の比較研究につながっていく。研修旅行先の沖縄で体験的に学ぶことにより比較研究はされに深まるだ

ろう。また、6 月の研修旅行の添乗員、沖縄出身で静岡に永住をされた方、市民として、行政として静岡に深く関わっている方々によるリレートークは、プロジェクトに奥行きを出す企画といってよいだろう。

パラレルに進行するプロジェクトが各学年で一つのプロジェクトとしての色合いを出しながら、「適切な判断力を持ち、個性を確立すると共に他者と協働し主体的に社会に貢献する人を育てる」という教育目標にせまる学年間の関連を見通した大きなプロジェクトとして機能しているものである。

（２）人的ネットワークの特徴―「縁」

大きなプロジェクトを可能にするのも本校の豊かな人的ネットワークによるものが大きい。

本稿で示されている実践は、平成 29 年度上半期における「産業社会と人間」と「総合的な学習の時間」での実践事例の中から、学校外部の専門性を有する人材との協働による取り組み事例を取り上げたものである。その特徴を俯瞰してみると、以下のような人的ネットワークの特徴が浮かび上がってくる。

【本校の卒業生、職員が他校で送り出した卒業生】さらにネットワークは、卒業生の家族へ広がっていく。

【学校と関連のある企業】研修旅行の添乗員もゲストティーチャーの一人となる。

【担当者（第一筆者）の知人】直接の知人だけでなく、親類などの知人ともつながっていく。

【高大連携事業】ふじのくに地域・大学コンソーシアムの高大連携出張講座（静岡県補助事業）、静岡県立大学の高大連携事業、静岡大学の高大連携出張授業を活用し、専門家とつながる。

以上のような日常的なかかわりが学校と外部との信頼関係を築き、連携の幅を広げていくものとなっていくのだろう。「縁」が本実践の通奏低音となっており、担当者の在り方や生き方の具体といってもよいだろう。外部連携のためのコーディネーター役を校内組織に位置づけることが総合的な学習の時間の肝であることはいうまでもない。

（３）ホールスクールアプローチ

『高等学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編』では、「各学校では校長の方針に基づき、総合的な学習の時間の目標を達成できるように、全職員が協力して、全体計画及び年間指導計画、単元計画を作成し、互いの専門性や特性を発揮し合って、実践していく校内推進体制を整える必要がある」（文部科学省,2009,p.79）と述べられている。本実践で、コーディネーター役を務めている担当者が校内組織に位置づけられおり、ホールスクールアプローチを基本としている。そのなかで注目すべき点を２点示したい。

一つは、学習に必要な予算の確保についてである。目標に即した指導計画の立案には、予算の裏付けが必要である。本実践では、文部科学省委託研究事業「実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究」によるものであり、人的ネットワークを最大限に生かした実践が可能となった。校長のリーダーシップのもと担当者の積極的な働きが欠かせない。また、各種の高大連携事業を適宜活用している点も見逃せない。

2 点目は、教職員の研修についてである。総合的な学習の時間を充実させるためには、教職員の研修は欠かせない。静岡大学教育学部の ESD・国際化ふじのくにコンソーシアムと共催で、2 回校内で全体研修を実施している。校内研修は、スキルアップだけでなく、教師間の協同性の向上にも資するものである。研修担当者の意識の高さが実現に至ったといってよいだろう。

（４）今後の研究の課題

本稿では、平成 29 年度上半期における「産業社会と人間」と「総合的な学習の時間」での実践事例の中から、学校外部の専門性を有する人材との協働による実践が可能となった背景について分析してきたが、さらに以下の２点を明らかにすることで総合的学習の時間の発展、教員養成や教員育成に資することとなるだろう。

- 「『縁』が本実践の通奏低音となっており、担当者（第一筆者）の在り方や生き方」について、担当者の教師としての生き方、生活者としての在り方
- ホールスクールアプローチに至る過程の内実

これらを今後の研究の課題としていきたい。

参考引用文献

文部科学省（2009）. 高等学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編. 海文堂出版.

Edgar Faure, Felipe Herrera, Abdul-Razzak Kaddoura, Henri Lopes, Arthur V. Petrovsky, Majid Rahnema, Frederick Champion Ward（1972）.Learning to be: The world of education today and tomorrow. http://www.unesco.org/education/pdf/15_60.pdf

Brundtland Report（1987）https://en.wikisource.org/wiki/Brundtland_Report

the Future we want(2012) https://sustainabledevelopment.un.org/content/documents/733FutureWeWant.pdf

注

本稿の事例は、平成 28 年度・平成 29 年度　文部科学省委託研究事業「実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究」の一部である。